

戸木田さんを思う	岩井 忠熊
戸木田 嘉久先生 追悼文	芦田 文夫
安藤先生と私	奥田 宏司
小原輝三くんの思い出	宮澤 正男
【編集後記】 故人を偲ぶ	M&S

戸木田さんを思う

「考える会」顧問
名誉教授 岩井 忠熊

戸木田さんの訃報はUNITAS誌上で知った。享年88歳といえは筆者より2年若い。ほとんど毎月顔を合わす機会があり、お互いにもう少し頑張ろうやと言いつつただけに淋しさが一しお身にしみる。

戸木田さんは九州にあった三池をはじめとする炭坑労働者の実態調査と労働運動の研究で目ざましい活動をされ、私は戸木田さんの立命大着任以前からその名を知っていた。

なんとなくたけだけしい戦闘的な人物という先入観をもっていたが、実は穏和でやさしい人柄であり、のちに常務理事をつとめられた時も石橋をたたいてから渡るような慎重な人柄だった。しかし、いつも労働運動研究者らしい1本のすじ金を感じさせられる判断をされたことが強い印象となっている。

戸木田さんは京阪電車で通勤されたので、長く桃山にすんだ私と一しょになる機会が多かった。いつもマル・エン全集を車中で読んでおられた。海外留学から帰られた時、当時まだ残っていた後進資本主義国日本というイメージの誤りを確信された旨を語られ、数年早くヨーロッパにいった経験をもつ私と意気投合したのも忘れられぬ思い出である。

戸木田さんは長年にわたる研究の成果を大著にまとめられた。
なすべきことをしとげて、満足された上で最期をむかえられたので
ろう。

羨ましい生涯だった。心から哀悼の意を捧げる。





戸木田 嘉久先生 追悼文



「考える会」代表世話人 芦田 文夫

「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」の顧問である戸木田嘉久名誉教授が、さる2月26日に亡くなられた。88歳であった。その数日後に、同門の三好正巳先生をつうじて知らされたが、すでに家族だけで葬送を済まされ、奥様も身辺がすこし不自由なのでお悔みやお参りも固辞されているということを知り、ただ悲しみを心に沈めるだけであった。

戸木田先生は、1962年経営学部が分離新設されたとき、立命館大学の経済学部九州産業労働科学研究所から移って来られた。そのとき私も一緒に新任で、以来半世紀の間ちょうど10歳上だったのでなにかにつけ兄のように私淑を続けてきていた。学部や大学の役職でも、組合活動でも、外回りの例えば京都労働者学習協議会の仕事でも、常に先生の後塵を押し受け継いできて、「自分も10年後はあのようになっておれるのだろうか」と目標を置きながら歩んできたようなわけである。〈注(1)：参照〉

私たちの「考える会」が発足した当初から、岩井忠熊先生とならんで戸木田先生は、喜んで顧問の任を引き受けて下さった。2007年12月結成の集いで「立命館民主主義の変質」を嘆いて切々と訴えられたあのお姿を、記憶されている元・現教職員も多いだろうと思う。「ニュース24

号」（2010年1月9日）では、そうなった歴史的経緯の根源に考察を加えようとした論稿を寄せていただいた。顧問といっても普通は名目だけのことが多いのであるが、先生は違った。「ニュース」をはじめお送りする重要な資料を実に丁寧に、おそらく私たちの誰よりも詳しく全てを読んで、様々な質問や意見を寄せてこられた。

数ヶ月に一度は、研究会や会議の後にながら時間を割いて直接助言を受けていた。それが楽しみだったのに、昨年後半頃からは足が痛んで歩くのが大儀だから、とお会いできないままになっていた。しかし秋には、門下生による米寿のお祝いの会に元気で出席されたと聞き、安堵していた矢先の突然の訃報であった。しばらくは虚脱感から抜けられそうもない。戸木田先生の立命館での研究とご活躍の跡は、1989年12月の定年退職記念講演「私の戦後史—労働運動と私の経済学研究」（『立命館経済学』第37巻第4・5号）に詳しく語られている。

立命館での27年間の前には、福岡での16年間の生活があった。1944年九州大学の入学式からそのまま兵隊にとられ、45年に敗戦で復学、47年に卒業、その後「財団法人九州経済調査協会」・「九州産業労働科学研究所」に勤務された。「日本資本主義はなんでこんな馬鹿げた戦争を引き起こしたのか」、その科学的究明に関



心をもって、はじめは農業問題つぎに労働問題に焦点をあて、九州石炭産業と労働問題の本格的な調査と研究に取り組みられた（数多くの調査報告書とその後年の集大成『九州炭坑労働調査集成』1989年、法律文化社）。ここで日本労働運動史上で最大といわれた三池闘争に直面され、初めての著書『労働組合はどう変わるか—三池闘争をへて』（1961年、三一書房）は生涯の研究テーマとなる労働運動論の原点をなすものとなった。

立命館時代について、戸木田先生は60年代—70年代—80年代の3つの時期に分けて振り返っておられる。学部・大学役職の上でも、それぞれの時期には重職を次々とこなしながらであった。1969年度には「大学紛争」時の学生部長、1972・73年度には人文科学研究所長、1976・77年度には経済学部長、1979年度「全学協確認」のときの教学担当常務理事、1983・84年度新学部・新学科設置の企画調査室長、そして1985年度からの新展開が図られた3年間の副学長である。いずれの時期も、学園の歴史的転換を画したときばかりであった。そんななか、「末川博先生の立命館大学にひかれ」「自由な雰囲気の中なかで…充実した日々を送ることができました」「後もふり向かないで、自分なりの歩幅で前に向かって歩むことができました」と述べておられる。どの一齣をとっても私は、例えば「大学紛争」時は教職員組合の書記長、副学長時には教学部長というように、先生に近接して仕事についていたので、個人的思い出には限りが無い。

研究テーマと領域も次々と拡充されていって、60年代—石炭産業からエネル

ギー産業へ、独占企業分析へ、そして『現代の合理化と労働運動』

（1965年、労働旬報社）が纏められ、日本の労働運動の基本方向を規定するようになる堀江正規編集『労働組合運動の理論』全7巻（1967—70年、大月書店）の中核的論文が書かれていく。70年代—労働組合運動の理論化、「労働組合運動の発展の合法則性」の問題を深められる。また、労働者階級の状態論（貧困化）、労働者階級の構成の変化（階級論）としても展開されていった。現代資本主義の蓄積過程と搾取領域の拡大にともなって、労働組合運動の闘争領域が制度的要求や政策的課題に広がっていき、70年代の後半になるとそれらが「経済民主主義」の問題へと発展させられていくことになる。なお、この時期に立命館大学生協が創立15周年記念として「協同組合講座」を企画し、先生の協同組合論の新たな展開がうちだされ論議を呼ぶことになる。

80年代に入って—戸木田先生は、相継ぐ講座ものの責任編集者としての位置につかざるを得ないことになる。『今日の日本資本主義』全10巻（1981—82年、大月書店）、『日本の労働組合運動』全5巻（1984—85年、大月書店）などである。共同研究の組織者・指導者としての類稀な才能が存分に発揮されていったのはこの時であった。立命館を中心とした労働・社会問題、経済政策、数量経済分析、社会主義論などの多くの研究者が学際的な共同研究に打ち込んだ。私自身の現在まで続く研究テーマ「自由・民主主義と社会主義」も、このときの第10巻『日本資本主義の民主的改革と社会主義の展望』によって触発されたものであった。

80年代には、個人としても『現代資本主義と労働者階級』（1982年、岩波の現代資本主義分析叢書5）を書かれ、編著『ME合理化と労働組合』（1986年、大月書店）で情報化の現代的課題にも門下生を総動



員してアプローチされようとした。そして、労働運動が岐路に立つおりから、その労働運動論を『戸木田嘉久著作集』全5巻（1988-89年、労働旬報社）として集大成しようとされた。

退職後90年代以降も、新たな課題での著書（『現代資本主義とME化』1990年、新日本出版社。『経済民主主義と現代資本主義』1993年、新日本出版社）を精力的に世に問われ、1998年からは「戦後日本労働運動と経済学」についての文字通りの総括に取り掛かれる（『労働運動の理論発展史—戦後日本の歴史的教訓』（上・下で1000頁を越す大著、2003年、新日本出版社）。このなかに、戸木田先生の理論と実践の関わりの全てが凝縮されている、と言ってもよいであろう。

これらの理論的展開は、いうまでもなく実践活動や啓蒙運動と密接に繋がる場所で生み出されていったものであった。

「連合」の右傾化・全労連の結成と関わって労働運動総合研究所がつくられていったとき、戸木田先生は創立総会（1989年12月）いらい黒川俊雄さんとともに代表理事に推され、2000年に顧問に退かれるまで第一戦で奮闘された。京都学習協では、創設以来50年間ずっと労働者・市民向け講義をもたれ、1979年から92年までは会長職を務めて尽された。亡くなるまで、労働・社会政策論、協同組合論などの集団研究を主宰され、私もその一員に加えていただいたことを感謝している。

このように辿り直してみると、研究者として大学人として実践家として、ただひたすら前を向いて、自らのことはかえり見ずにいつも周りの皆んなを励まし、誠実に生き徹された一人の人間の大きな姿が浮かびあがってくる。そして、先生のことを想い悲しむ暇があるのなら、社会の変革のためにすこしでも力を出して欲しい、と諭されているような気がするのである。

<注(1)>この時の思い出を戸木田先生は「立命館百年史紀要第13号（2005年3月発行）に『1960年代の経済学部と経営学部—忘れえぬ人々、その学問と教育—』で述べておられます。（事務局）



安藤先生と私



3月5日、安藤次男先生が亡くなりました。昨年5月下旬に先生は、突然、講義の休講措置をとられ、私たちは何があったのかといぶかった。しばらくして入院

国際関係学部名誉教授 奥田 宏司

されたという情報が伝わってきた。奥様に郵便をお送りし、お見舞いに来てくださいという返事をいただいたのが夏休みに入りかけた時期であった。先生は、少

し瘦せられていたが、病気以前のいつもの様子で楽しく小1時間談笑した。

秋になって先生とは葉書で簡単に会話しながら、2回お宅へお見舞いに行くことができた。12月下旬、先生は感慨深そうに、ゼミ卒業生のアルバムを見舞いに行った私たちに見せられた。そのアルバムは、先生の病気を知った多くの卒業生（海外から駆けつけた者も）の集まりを撮ったものであった。先生が学生を大切にされる方であることを改めて感じ入ったものである。それから3ヶ月もしないのに、先生は逝かれた。

先生とのお付き合いの思い出を記してみよう。国際関係学部が1988年に発足して間もない頃の居酒屋での議論をまず思い出す。政治・法律、経済、文化・社会の3分野と地域研究をもつ学部というのは運営が難しいのではないかと、コンパクトな学部にした方がよいのではないかと私は安藤さんに敢えて質問した。安藤さんが現在の国際関係学部の基本性格を設立時に構想されたとき、その中心におられたからである。安藤さんは本当の国際関係学部を作るにはこれが正当なのだと、いろいろな角度から熱意を込めて話された。私はこのとき全面的に納得したのではなかったが、その後、「97学部改革」に私が関わったとき、改革の方向性は安藤さんが話されたものをさらに展開するものになったと思う。全国的に国際系の多くの学部ができていくが、国際政経や国際文化等、部分に傾斜した学部がほとんどで、国際関係学を正面に打出し、全方位的な展開をはかるといふ学部づくりの課題は安藤さんたちによって設立時に据えられたのだと思う。

国際関係学部が完成年度を迎える最後の年、安藤さんは調査委員長であった。

私は委員会の運営、文書の作り方を安藤さんのそばで教わった。とくに年度末の調査委員会のまとめ文書作成のときには、私が次年度の調査委員長ということが決まっていたので、安藤さんは私を自分の横に座らせ、個々の問題についてのまとめ方を2人で確認するようにワープロを打ち込んでいかれたのを思い出す。



それから数年して安藤さんは突如教学部長に就任された。就任の詳しい経緯については私は知らない。このことについて安藤さんとその後も話すことはなかった。安藤さんにとっては長い立命館大学での生活の中で一番厳しい時期ではなかったかと思う。95年度私は学部主事で「97学部改革」の議論に没頭しており、この改革は教学部マターでもあったが、なぜか安藤さんはこの課題に参加されず、私は副総長、教学部副部長と折衝し、安藤さんと話すことはほとんどなかった。不思議な時期であった。

安藤さんは1998年に学部長に就任された。先生の学部長時代に特記すべきことは西園寺キャンパスから恒心館への学部移転であった。設立時に学部規模が160名であったのが臨時定員の受入れ等によって漸次増加したのと、「97改革」の約束どおり国際関係学部が衣笠キャンパスで国際インスティテュートの展開に責任を負うこと等が理由である。安藤さんは学部内に実働的な委員会を設置され、自ら計画作成をリードされるとともに予算問題など大学当局との折衝に腐心された。移転が実現したのは安藤さんの学部長の3年目の2000年9月下旬であった。国際関係学部が恒心館においてさらに飛

躍できた土台は、安藤先生がリードされた移転にあることを明記しておきたい。

2004年の夏から秋にかけて「総長選挙規定案」が出され、それ以後、立命館大学はさまざまな問題を抱えるようになった。05年の業協のとき、私は安藤さんに業協への参加を誘った。そのとき安藤さんは参加しない理由として「トップの顔を二度と見たくないのだ」とポツリと言われた。先生が教学部長時代に経験された「苦々しさ」を改めて知らされたものである。安藤さんは「一時金訴訟」の原告にもなられた。安藤先生は学部長の職を全うされて以後、学部内の委員等は受けられたが全学的な役職には就かれず、学生への教育と協同研究の方へより多くの時間を割かれるようになった。安藤先生と学部の基礎演習テキスト『ニューフロンティア国際関係』（2006年）を協同で編集したことも懐かしい思い出である。先生は編集だけでなく第1章も担当され国際関係学の構築をめざすスタンスを明らかにされた。現在の『エティック国際

関係学』（2011年）は、先生が編集の中心となられた『ニューフロンティア』を継承している。

告別式の際の喪主様の挨拶にあったように、先生の学生への愛情、学部愛、立命館大学への想いは尋常なものではない。学部20周年の東京での校友会では、先生は長嶋茂雄氏（先生はジャイアンツ・ファン）になぞって「国際関係学部は永遠に不滅です」と挨拶された。また、奥様とはよく旅行をされたようである。奥様の影響だと思うが古代史に興味をもたれていて、私が聞いたのは明日香への想い、高野山の宿坊に泊まれた話である。

先生と私は年齢的に4年しか違わず、兄のような先輩としてお付き合いをさせてもらった。せめてあと10年ぐらいお付き合いをしたかった。安藤さんは病気を知って、なぜ自分という気持ちをもたれていたと思うが、私たちにはほとんど苦しい心のうちは示されなかった。さすがである。このことも思い出として私の脳裏にしまっておきたい。



小原輝三君の思い出



書記局 宮澤 正男

今年1月22日(火)、彼からの以下のメールは、念願の学園紛争の写真集〈注(2)：参照〉が大詰めに来た内容でした。「いま、立命館の学園紛争を記録した写真記録を出版する準備がすすんでいます。原稿は、すべて揃い、岩井忠熊先生に序文を書いていただきました。写真の割り付けも終わりました。まもなく校正作業にはいる予定です・・・中略・・・体調が毎日変化していますが、なんとか、細く、長く、しぶとく生きたいものです。前回報告したガンマーナイフ治療は、体調の関係で、受けないことにしました。」

その数日後、私がガンマーナイフの成功例とがん治療薬の新聞記事を参考に送った処、2月7日に次のメールが返ってきた。「最近、とにかく体調が良くありません。体調の落ち込みが、精神的な落ち込みにつながるよう精神的にもがんばっていきたいと思っています。そのために、ヨメさんのサポートは大切です。とにかく、ヨメさんと二人でがんばって生きていく以外方法は

ありません。いまとなつては、他人の闘病記は参考にしたいと思わないので、せっかく資料を送ってもらったのに、申し訳ありません。では、また。」

2月13日(水)、この季節にはめずらしく暖かな日和の午後、彼は奥さんの運転する車で、気分転換を兼ねて書記局を尋ねてくれた。その時、奥さんに7日のメールで、「他人の闘病記は必要ない、妻と過ごす時間の方が大事だ」と、のろけを聞かされた、と話すと、奥さんは「初耳です」と微笑みながら彼の心境を話してくれた。

そして、前回1月25日(金)書記局を尋ねて来られた時、出勤日でなかった同期の石岡清重君に書記局に来てもらい、「考える会」の作業で来ていた広末さんと4人で話をし、帰り際に撮った写真撮影が彼との最後となるとは思わなかった。

彼が腎臓がんを発症する以前、1991年の8月3日から12日まで小原君と石岡君、林隆一さんの家族や日中友好協会立命支部の灘本清五郎さんなど、教職員その家族含めて10数人で、北京、大連、西安・上海などを周る中国旅行が生まれ、私もその内の一人として参加した。その見学先のひとつ、西安の兵馬俑博物館で陳列品、兵馬俑発掘現場を見学している際のことであった。旅行前の事前ガイダンスでも注意事項にあり、博物館には写真撮影禁止の表示もあったが、彼は好きなカメラのカバーをせず肩からさげて手で触っていた。その姿を見つけた衛視が近づいてきて、身振り手振りをまじえて怒った調子で小原君に詰め寄ってきた(もちろん中国語で)。彼はそれにたじろぎもせず、逆にその衛視を詰め始めた。衛視は「もう結構!」と言わんばかりの渋い顔をして去っていった。

後で、彼に何を話していたのか聞くと、「写真を撮っただろう、フィルムを出しなさい」と言いがかりをつけて来たから、自分は「撮っていない。もしフィルムを現像し、写っていなかった場合、あなたはどのような責任を取るのか」と逆に詰めてやった(もちろん中国語で)と平然と答えた。ツアー参加者は皆、さすが!と彼を讃えた。

彼は何度も中国を訪れているので、私に土産品店他やタクシーを呼んだ時に正札値と値切り値があることを実践的に教えてくれた。

その彼は、小春日和の2月28日早朝、「細く、長く、しぶとく生きたい」と願った人生の期間を値切られて10年余の闘病の末この世を去った。残念でならない。(2013年4月5日:記)

<注(2)>: この写真集「立命館 大学紛争の五ヵ月-1969-」(定価1,890円)は、5月上旬発売されます。書店、文理閣、または立命大生協書籍部、宮澤他が取り扱っています。ご購入くださいますようお願いいたします。



『立命館 大学紛争の五ヵ月 1969』直接購入申込要領

【価格】 1,890円(税込み)+240円(送料)=2,130円(合計)

【送金方法】 本書到着後、同封の郵便振替で(送金手数料無料)お支払いください。

※お金を先に振り込む場合、送金手数料をひいた2,050円を下記まで、お振込ください。

口座番号:00940-9-172110 加入者名:小原輝三写真集普及委員会

【お申し込み先】 文理閣(〒600-8146 京都市下京区七条河原町西南角)

Eメール:eigyo@bunrikaku.com

FAX:075-351-7560(なるべくFAXをご利用ください) TEL:075-351-7553

※ご住所・お名前・電話番号・購入冊数をご明記の上、FAXにてお送り下さい。



【編集後記】

故人を偲ぶ

私たちのニュースで「追悼特集」を組むのは、はじめてです。「考える会」発足以来顧問に就かれていた戸木田先生が2月26日にお亡くなりになったとの報を受け、先生の残された業績を退職教職員だけではなく、広く現役の教職員に知って欲しいと思ったのが、きっかけでした。

ところが、続いて2月28日、「考える会」の活動に深い理解を寄せていただいた元国際部次長の小原輝三氏(1991年度組合副委員長)がお亡くなりになり、続いて3月5日、「考える会」のメンバーとして我々を励まして下さった国際関係学部元学部長の安藤次男氏(1981年度組合書記長)がお亡くなりになりました。わずか一週間ほどの間に、私たちの師であり友人であった人々が3人、この世を去りました。私たちは、これらの方々への在りし日を偲び、その姿を心に留めておきたいと思ったのです。

戸木田先生の追悼文は、先生とともに「考える会」の顧問になっていただいた岩井先生と、同じ学部にあつて先生を敬愛された本会代表の芦田先生にお願いしました。安藤先生の追悼文は、国際関係学部発足時より苦勞をともにされた奥田先生にお願いし、小原さんの追悼文は、刎頸の友ともいふべき本会事務局の宮沢さんにお願いしました。

原稿をお頼みした皆さんは、思いが溢れて長い文を書きたいと思われ、実際に書いてしまわれた方もおられました。戸木田先生の業績を丁寧に紹介された芦田先生のを除けば、どの方にも短くまとめていただくよう、お願いしました。編集上の都合とはいえ、無理を聞いていただいた皆様に、心から感謝いたします。

ところで、ユニタス443号を見れば分かりますが、もう1名、大谷良一先生が2月6日に亡くなっておられました。産業社会学部の学部長や全学の教学部長を務められましたが、よく通る大きな声で、大講義にもマイクを使わないことで有名でした。95年に退職された後、いつしかキャンパスから遠のかれ、どうしておられるのだろうかという声が聞こえはじめた矢先の、ご逝去の報でした。「考える会」と直接の関わりはありませんでしたが、今の立命はおかしいと絶えず言っておられたことが思い出されます。先生もまた、学園のために尽くし、学園を豊かにすべく奮闘された方でした。記して、哀悼の意に代えさせていただきます。

今学園では、beyond border という言葉が、踊っています。あまりにも賑やかに語られるので、地に足がつかない言葉の軽さばかりが際立ちます。おそらく意図としては、現在という地平を這いずり回るのでなく、未来に向かってジャンプしようと呼びかけているのでしょうが、現在を形造る歴史と伝統に敬意を払うという発想が抜け落ちているものだから、ジャンプしてどこへ向かうとすることが見えないという結果に終わるのです。

越境の思想は、それが未来を切り拓く創造的な力を持つためには、自らの現在を規定する過去を、掘り下げて思考しなければなりません。現在の自らの姿を確認することを通じて、自らにふさわしい未来の姿を描けるのだといえましょう。その意味で、越境の思想は現在を起点にしつつ過去と未来を結びつけることができる。先達の残した足跡を振り返り、自らのアイデンティティを確かめ、未来の私を、未来の学園を創造することができる。

本特集は、そのことを願って編集されたといつて過言ではありません。どうか皆さん、beyondする前に、現在のborderのヒズミやユガミにも目を配り、何を目指すべきか共に考えていきましょう。

<M&S>

事務局連絡先：〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学教職員組合 気付

「立命館の民主主義を考える会(元教職員)」

TEL:075-465-8200(宮澤気付) FAX:075-465-8201

メールアドレス rits.democracy@gmail.com

ホームページアドレス <http://rits-democracy.blogspot.com/>